

男性保育者の歌声の実態に関する研究

保育科 鈴木 慎一郎

本研究の目的は、男性保育者の歌声に関する実態調査を行い、彼らが抱える課題を明確にし、保育者養成における音楽教育の在り方へ反映させることである。

研究方法として、第一に先行研究の検討を行った。主に村尾(2003)、弓場(2004)、小畑(2007)等の研究成果を概観した。

第二に、保育者養成短期大学に在籍する男子学生への実践と実態調査を行った。2009年度保育科には、第1学年に12名、第2学年に6名の男子学生が在籍した。「音楽(声楽)」、「音楽(声楽)」の授業実践を進める中で、男子学生の取り組みを観察し、彼らが抱える課題を整理した。中でも、第1学年に1名、第2学年に1名、音程が正しく取れない(以下、「音痴」と表記)男子学生がいることを確認した。音楽に対して強いコンプレックスを感じており、本人の申し出もあったため、継続的な個人指導を行った。

ところで小畑は、歌唱者(対象者)が自分の歌唱に対して行う評価行動の中で、特に音高・音程に関するものを「内的フィードバック」、指導者が対象者の歌唱に対して行う評価行動の中で、特に音高・音程に関するものを「外的フィードバック」と位置付ける(小畑2007:23)。上記の2名の男子学生に共通するのは、内的フィードバックができていないため、音程が合っているのか否かを認知できていなかった。そのため、筆者は「直接的修正行動(対象者の音高・音程を直接修正する)」、「規範提示(規範となる音高・音程を対象

者に示す)」を取り入れ、外的フィードバックを行った。その結果、以下の特徴がみられた。

- ・階名で歌うことをかなり苦手とし、音程が不正確。
- ・喚声点であるa1(独音名)を超えると、特に音程が不正確となる。また、跳躍音程も苦手とする。歌詞唱の場合は幾分音程が落ち着くものの、喚声点を越える音や跳躍音程では同様に苦手とする。
- ・外的フィードバックを継続することで、音痴は少しずつ改善された。しかしながら、内的フィードバックはできていない様子。

なお、これらの特徴は弓場の「歌オンチの8タイプ」に基づく、階名唱については「TypeD 音にぜんぜん合わせられない」、歌詞唱については「TypeC 合ったりはずれたり」に該当する(弓場2004:68-74)。

第三に、読譜に関するアンケート調査を実施した(2010年2月)。

以上、現在、研究は継続中であり、今後は、幼稚園や保育所で勤務している男性保育者へと対象を広げ、実態を調査していきたいと計画している。

【引用文献】

- ・小畑千尋(2007)『「音痴」克服の指導に関する実践的研究』多賀出版。
- ・村尾忠廣代表(2003)『裏声とその活用を視点としたジェンダーの研究』平成13~14年度文部科学省研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書。
- ・弓場徹(2004)『声美人・歌上手になる奇跡のボイストレーニングBOOK 効果てきめん 世界が認めた『YUBAメソッド』主婦の友社。